2019年12月02日 中日新聞 朝刊 25頁

備える 3.11から　第170回　検証台風19号 情報伝達の課題

水門の閉鎖 国伝えず

災害時には、行政機関が持つ情報を住民に素早く正確に伝えるのが鉄則。それが命や財産を守る個人の行動につながるからだ。ただ、各地で大きな被害をもたらした台風19号では、避難勧告や避難指示が一部の地域で遅れ、洪水への警戒を促す重要な情報も流れなかった。住民の視点に立った適切な対応はなされていたのか。千曲川など河川の氾濫で、広範囲が浸水した長野県の事例を基に検証する。

（我那覇圭、安永陽祐、中田弦）

台風19号の影響で左上の堤防が決壊した皿川。右を流れるのが千曲川＝長野県飯山市で（市提供）

長野・飯山の皿川 堤防決壊

国土交通省千曲川河川事務所（長野市）は、長野県飯山市を流れる千曲川が増水した際、支流の皿川への逆流を防ぐための水門を閉じた事実を市に伝えていなかった。閉門すれば出口を失った皿川の水があふれ内水氾濫が起き、周辺が浸水する恐れが強まる。情報の届かなかった住民からは批判の声が出ている。

「もっと早く知らせてもらえれば車を移動できたのに」。皿川の堤防決壊現場から、数百メートル離れた倉庫が浸水した無職前沢孝臣さん（74）は憤る。倉庫は一階部分が浸水し、一九八〇年式のジープなど愛車七台が水没した。

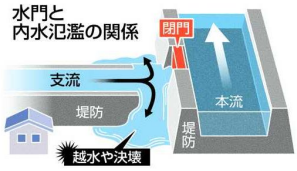
前沢さんは、台風19号の接近で雨脚が強まった十月十二日夜から、一時間おきに倉庫のそばを流れる皿川の様子を確認していた。十三日午前一時すぎ、堤防から水があふれ出ているのに気付き、市役所に電話で連絡。倉庫の車をすぐに移動させようとしたが、押し寄せる濁流になすすべもなく、避難せざるを得なかった。

千曲川の水門は、増水時に同事務所が閉めるかどうかを判断する。同事務所によると十三日午前一時半、千曲川の水位が上がったため、開閉作業を委託している地元の作業員に閉門した上で避難するよう指示した。ただ、市と皿川を管理する県のいずれにも閉門の連絡はしなかった。

水門を閉じる作業が完了したのは十三日午前一時四十四分で、前沢さんは全く気付かなかったという。「倉庫で眠る日もあり、一歩間違えれば命の危険があった」と振り返る。

万行康文副所長は「水門の操作要領では、故障や操作が遅れるなどの場合のみ関係機関に通知するように定められている」と説明。皿川にも堤防があるため、閉門しても内水氾濫が必ず起きるわけではないとして、「当時の対応に問題はなかった」と強調した。

だが、飯山市の足立正則市長は十一月二十五日の記者会見で、「（河川の氾濫に関する）状況がよく分かるので、本来であれば水門を閉めた後に連絡をもらえればよかった」と指摘。国交省側に、豪雨災害の際の情報伝達のあり方を見直すよう要望していると明らかにした。



避難勧告遅く 市にも批判

皿川を巡っては、流域の飯山市が避難勧告を出すタイミングが遅かったことにも批判が出ている。

市によると、「皿川の水があふれた」という連絡が住民から最初に寄せられたのは、十三日午前一時二十分ごろ。しかし、市が川のすぐ南側にある北町地区に避難勧告を出したのは、それから約一時間後の午前三時二十分だった。

皿川の堤防が決壊したのは午前四時十五分ごろとみられ、浸水区域も次第に拡大。決壊現場から南に約一キロ離れた市役所がある福寿町地区にも被害が及んだが、同地区に避難勧告が出されたのも午前六時四十分と遅れた。その時点で市役所付近ではひざ下まで水が迫る状態だったという。

「越水」の情報から1時間後

長野県内では国が管理する千曲川をはじめ、主要な河川で豪雨時に流域のどの地区が最大で何メートルほど浸水する恐れがあるかを示す「浸水想定区域図」が作成されている。流域の市町村は、これを基に最寄りの避難先や避難経路などを書き加えた「洪水ハザードマップ」を完成させ、住民に知らせている。

ただ、どの河川の浸水想定区域図を作るかは、河川を管理する県が主に決める。指定に明確な基準はなく、中小の河川では作らない場合も多い。県が管理する皿川も同様で、県は水位計も設置していなかった。飯山市が皿川の氾濫をすぐに把握できず、避難情報が後手に回ったのも浸水想定がなく、監視体制が弱かったという事情がある。

なぜ浸水想定区域図が作られなかったのか。県河川課は「一河川につき一千万円の費用」とのコスト面を理由に挙げる。作成は民間会社が請け負うが、決壊が想定される場所ごとに周辺地区の浸水想定を積み上げるという専門性の高い内容が、コストの押し上げ要因になっているという。

阿部守一知事も被災から一カ月後の十一月十一日の会見で、「どの河川でどういう浸水想定を作ったらいいか、市町村にハザードマップを作ってもらうかは改めて考えたい」と述べた一方で、「作るにあたってもお金がかかる」と対応の難しさをうかがわせた。

「情報伝達の仕組み整備を」 西日本豪雨でも類似例

水門の開閉を巡っては、昨年の西日本豪雨で広い範囲が浸水した福岡県久留米市でも、市が筑後川に注ぐ支流の水門を閉じたとの情報を住民に知らせず、被災後に批判を浴びた。

筑後川は国の管理河川だが、市が委託を受けて水門を開閉している。市は被災後の検証で情報の連絡体制を見直し、主要な水門の開閉情報をホームページで公開するようにしたほか、閉門時には地元消防団に住民に知らせてもらうように改善策を講じた。

検証作業に加わった九州大工学研究院の矢野真一郎教授（河川工学）は「一般的に水門を閉めなければ、流量の多い本川の水が支川に逆流して被害規模がより大きくなるため、閉門の判断を下すことは理解できる」と説明する。

ただ、閉門は支流の氾濫を引き起こす恐れもあるとして、①閉門する状況が迫っていると予測できた時点②実際の閉門時③再び開門する時点―で、河川事務所から関係自治体に情報を伝える仕組みを整える必要性があると指摘。「自治体の組織内でも情報を河川管理部門だけでなく、危機管理の担当部門にも届くように気を付けるべきだ」と強調した。

次回の「備える」は、1月6日の掲載予定です。

歴史に学ぶ ㉔ 伊勢湾台風被害 秀吉伝承お墨付き 津島神社

伊勢湾台風で一度は倒壊した南門の下に立つ堀田さん（中央）＝愛知県津島市神明町の津島神社で

天王信仰の総本社で、古来多くの参拝客を迎えてきた津島神社（愛知県津島市神明町）。境内の南門は一九五九年九月の伊勢湾台風で崩れた歴史を持つ。不幸な出来事ではあったが、再建の過程で明らかになった史実もあった。

木製の高さ六メートルほどの南門は、暴風で倒れた直径一・五メートルの杉の大木に寄り掛かられたことで倒壊した。当時九歳で、近くに住んでいた津島神社宮司の堀田正裕さん（85）は「こんなに大きな杉と門が倒れることがあるのかと驚いた」と、台風のすさまじさを振り返った。

南門は倒壊後しばらくそのまま放置され、子どもたちが門に乗って遊ぶ様子をとらえた写真も残っている。二年後にほぼ元の木材を使って再建され、そこで大きな発見があった。

南門は一五九八（慶長三）年に豊臣秀吉の息子秀頼が父の病気治癒を願って寄進したと古文書によって伝えられてきたが、確実な証拠はなかった。それが工事の最中、門の上部に使われる棟木に「慶長三年八月二十八日」と墨で書かれているのが見つかった。

完成日を思わせる記述から、伝承の信ぴょう性が高まり、南門は県の重要文化財に指定された。堀田さんは「伊勢湾台風がなかったらずっと分からなかった。不思議な出来事でした」と、堂々たる構えの南門を見上げた。（深世古峻一）

（c）.中日新聞社　無断転載、複製、頒布は著作権法により禁止されています